

審査の結果の要旨

氏名 張 琼華

本論文は、中国における多文化教育の政策・形態・メカニズム・機能を、二言語教育に焦点化して、民族共生と社会統合の観点から実証的に分析し、同国における二言語教育の課題と可能性について考察したものであり、本論7章と序章及び終章から成り立っている。

序章では、第1に、多文化主義と単一文化主義の関係、多文化主義と同化主義の違い、リベラル多元主義とコーポレート多元主義の区別を確認し、第2に、社会的正義について配分的正義の2つの立場（機会の平等と結果・条件の平等）と関係的正義の2つの課題（差別・抑圧の問題と民族アイデンティティの問題）を検討し、第3に、社会統合についてタテの統合とヨコの統合を区別し、以上を踏まえて、二言語教育に関する本論文の課題を設定している。

第1章では、領土的に中国と同規模のアメリカ、カナダ、オーストラリアにおける多文化主義と対比しつつ、多文化主義に至るまでの社会統合パターンの歴史的展開を概観し、中国の多文化主義をコーポレート多元主義の一形態と位置付け、その特徴を考察している。

第2章では、中国における55の少数民族について、二言語教育を実施しているか否か、実施している場合、教授言語は漢語か民族言語かについて統計的に分析し、民族文字の有無が前者を規定し、歴史的に科学圏であったか否かが後者を規定していることを明らかにした。

第3章から第7章では、チベット文化と漢文化が交錯し、民族言語と漢語の二言語使用の多い四川省阿壩チベット族自治州の中学2、3年生を対象に実施した質問紙調査（650サンプル）とインタビュー調査（55サンプル）のデータに基づき、民族共生の問題を機会の平等（配分的正義）と文化的共生（関係的正義）に分け、社会統合の問題をタテの統合（国家との関係）とヨコの統合（他民族との関係）に分けて実証的に分析し、以下の諸点を明らかにしている。

（1）少数民族出身者が教授言語の異なる中学校（漢語/民族言語）のどちらを選択するかは、家庭環境（階層、家庭の使用言語）と3タイプの小学校（チベット語学校、漢語学校、チベット語を教えない学校）によって大きく異なる。また、中学校選択の動機として、当然の選択、消極的選択、義務的選択、功利的選択、嗜好的選択が認められるが、それも家庭環境や小学校タイプによって異なる（第3章）。（2）民族アイデンティティの内容及び拠り所について、一貫して漢語による教育を受けてきた生徒は血縁・地縁にアイデンティティの根拠を置くのに対して、一貫して民族言語による教育を受けてきた生徒は民族文化の共有にアイデンティティの基盤を見出す傾向があり、両方の教育を受けてきた生徒は血縁・地縁だけでなく、民族文化の共有にもアイデンティティの根拠を置く傾向がある（第4章）。（3）選抜・配分システムは、大学進学については競争型・準競争型・閉鎖的競争型が、就職については自由競争型・アップダウン型・地元型が区別されることを指摘し、どの進路タイプを希望するかは教授言語の違いによって異なること、及び、その違いは漢語能力や民族帰属意識によって差別的に媒介されており、必ずしも制度的な制約によるものではないことを明らかにした（第5章）。（4）タテの社会統合に関しては、ナショナル・アイデンティティが、一貫して民族言語による教育を受けている生徒では表層的な傾向があり、一貫して漢語による教育を受けている生徒及び漢語と民族言語の両方による教育を受けてきた生徒では信念体系の共有というレベルにある（第6章）。また、ヨコの社会統合に関しては、他民族文化の理解や他民族との協調意識が、前者の場合には表層的志向が目立つのに対して、後者の場合には積極的・協調的志向が目立つ（第7章）。

終章では、7章までの分析結果を要約し、二言語教育が民族共生と社会統合に果たす機能について検討し、多文化教育・二言語教育の課題と可能性について考察している。

これまで中国では、二言語教育に関する政策記述的研究や言語学的研究は多数行われてきたが、本論文は二言語教育の政策・制度・実態を民族共生と社会統合の視点から実証的に分析し、そのメカニズムと機能を明らかにしたものであり、また、教育機会・進路選択及び民族意識・国民意識の形成に関する教育社会学的研究課題に中国を事例としてアプローチしたものであり、その2つの領域で新たな知見を呈示し、今後の研究の発展に貴重な貢献をするものと判断される。よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。